外遊随想

ヨーロッパの環境事情視察記

白石直典*

54年8月、15日間の日程でヨーロッパの環境事情を視察する機会に恵まれたので、この旅行についての全般的な印象についてのべてみたい。

環境情報センター側のアレンジと旅行社の欲張り合いの結果、視察内容は大変よかったものの日程がとにかく忙しい限りで、まさにヨーロッパ早廻り競走と相成った。ブラッセル廻りをさせられた等はトバッチリの一つであったが、お陰で予定になかったブラッセルの街とグランプラスの広場に2時間ではあったが立ち寄れたのは（今回の行程中のんびり出来た束の間）、望外の喜びであった。時は日曜日の朝9時、広場はまだ眠っていた。しかし我々は先を急がねばならない。バスで国境を越えてオランダに入る。これからがいよいよ視察の開始となる。

アムステルダムは水の都である。その土地造りは、無数の大きい丸太とコンクリートパイルを打ち込んでは岸辺を確保していく。そして強い根をはるにれの木を徹底的に植えめぐらせることにある。2時間のクルーズで、余計なことだがこれはわざわざベネチアに行く必要はないぞということがわかる。水の底にホテルの調理場が見える。裏長屋の仕事場が見える。家は陸の上に建てるものとばかり思っていたが、ここでは水の中から家がつき上っている。しかし悲しいかな水は汚ない。透視度零。不快なために水面には目をやらないことにして陸上の建物を見る。アムステルダムの市長の家が、庶民の続き住宅の一つにあることもわかる。傾いている建物が多い。アムステルダム最大の唯一の近代的白亜のホテル（日本企業のホテルで約20階）も、建って日が浅いというのに地盤が沈下し始めたという。長年の経験からか、ここでは大建築は建てない。ここに金と近代化とで進出した日本企業を彼等はどうみているだろうか。その答はもう出かかっている。すべてに調和と景観を維持してきた17世紀の建物の中に、白いコンクリートの建物があるのはここ一つである。我々はそこに2晩押しこめられた。ヨーロッパに行ってまで日本のホテル（従業員は現地人）に泊まったり、あるいは日本料理店を探す等は全く能のない話である。次にこの町の中央駅は、東京駅（丸の内側）を造る時にモデルにしたという話である。したがってこの駅は古い。構内に入ると一段と古い。日本流では機能性は零。しかしそれが美しいのである。これからも長く建ち続けることであろう。しかるにわが東京駅の丸の内側は近くとり壊すという。何たることよ。一方郊外にあるヨーロッパ屈指のスキポール空港は、これまたわが有名な成田空港がここをモデルにしたらしいが、こちらも機能していない"かたわもの"であるのはご承知の通り。日本の近代の夜明けはオランダからであるが、現代も果してどんなものだろうか。アイセル大干拓は千年の歴史、オランダの国家的宿命の行事である。

神は地球を造ったが、オランダでは人が国を造っている。直線30Kmの大堤防を造って海を仕切り、まず淡水湖化し、最終20万ヘクタールの土地造りの真っさい中である。壮大なものである。草地を造って牧場・農場・森林・街・工場・レクリェーションセンターを、そして大湿原まで造り、名だたる野鳥の宝庫にしてしまった。海を1mでも埋め立てれば、干潟がなくなっ

*当協会理事　技術部長

て鳥が来なくなるという常識とは大きいひらきがある。そしてDULRUSHという植物を、幅3m、長さ約300mの溝の10数本に植えて、これを通すだけの自然大排水処理場は驚きであった。そして広い周園を森林帯でとり囲んで臭を遮断している、なお溝の汚水の地下浸透を監視するため、深さ3mの地点で常時モニタリングしていた。これと後日訪れたストックホルムでの10数ヘクタールに及ぶ地下大排水処理場（後述）といい、これが同じ人間のすることかとあきれる。次に交通騒音を防止している珍らしい風景を見た。アムステルダム郊外でアウトバーンのすぐそばに土手が続いている。その高さは住宅街の屋根より高い。土手には美しい芝と木が植えてあり、教えられなければその向うに大住宅があろうとは全く想像もつかない。彼等はこうして騒音を防止している。しかし彼等（スウェーデンを除く）各国でも抜けている面もある（実際には抜けていないかも……後述）。それは水質保全の面である。

まずロッテルダムの市港湾局でのこと。ここでの主要業務の一つは、油断するとすぐライン川やマース川等から流れこんで堆積する土砂を浚渫することである。そのヘドロを近くの北海に投棄している。海が汚れるのは気にならない。魚を食べないからであるという。（オランダでは、70才以上にならないと魚を釣ってはいけないし、また釣った魚は再び放してやる法律になっている。釣った魚を何故放さねばいけないかは聞きもらした。）また湾内に少し油が浮いていようが、CODがどうとかは話題に値しないという。そして、世界に冠たるも、しかし汚れきった大ロッテルダム港湾内には、遊覧船が何雙も行き交う。乗れと奨められるけれど、このような汚い水面を見ただけでその気も起きない。水に敏感になり過ぎてはヨーロッパでのつき合いは難しいことがわかり始めた。次に干拓平野の中に新しくこれから都市を造るというズータミア市でも、工場誘致の計画はと問うと、公害の少ないビール工場がよいと広報官は言う。とんでもない。このての業種は負荷量が大きいので不利ではないかと言うとけげんな顔をしている。

現場視察中、すでに建設中のそのビール工場があった。有名なハイネッケンであり、オランダでは昼も夜もこのビールを味わった。なおこの地帯は、地下200mから地下水を汲み上げて飲料水としているという。ライン川があまりにも汚なくて役に立たないからである。次に西ドイツで中都市の模範であるらしいノイス市の下水処理場では、単なる大きい沈殿槽がある程度のプロセスで上澄をすぐそばのライン川に放流している。BODはよくて120㎎である。

しかし現在活性汚泥槽を建設中であった。次に近くのエッセン市の有名なルール工業計画連合本部の場合では、壮大な計画の下に、すなわち東西30Km、南北130Km、面積4970平方Kの中に550万人が住んでいるその狭い中で、工場と住宅の間は森林帯を造って徹底的に分断している。排気ガスもふんじんもすべて分断するほどのふかぶかとした森林帯である。そしてその中心に大ゴミ埋立場がある。日本でこういうことが考えられるであろうか。完成の暁には、平原の中にゴミで出来た30mの広い緑の台地が出現する筈である。またところどころにある石炭を掘った後のボタ山には、アメリカレッドオーク、カッパーリーチ、カシ、白カバ等の木が青々としていて、その緑化運動は大したものであった。ここまでは素晴らしいの一語に尽きる。

しかしこの埋立場の周園に廻らしたクリークに、埋立場の浸出水を導いているが、それが無処理の真黒なままにライン川に流れこんでいる。河口のロッテルダムから700Kmもあろうかこの上流の地点ですでに福岡市那珂河口以上の汚れかたである。それより約50Km上流のボッパードからバッハラッハにかけてのライン川でも、醤油のような色である。ローレライの詩情もう

すれる。そのことがスイスに入ってうなずけた。チューリッヒやベルン辺りの川の色がすでにおかしいのである。なおベルンには、日本を出る時から私には一つの疑問点があった。それは雪どけ水で豊富であろうと思われる水の原価が、福岡市上水の1.5倍も高いということである。

しかしこの疑問はついに未解決のまま日本に帰った。さらに水質の観察をウィーンへと続けよう。ウィーン160万市民のうち130万人分の排水は無処理のままドナウ運河に直接放流されている。去年までウィーン大学の教師をしていたというウィーン市の担当官の発言であるからこれは本当の話である。6時間もすれば他国へ流れる（これは惜しくも失言）と笑ってのたまう。美しき青きドナウはほんに18世紀のよき時代よ。ところで先刻のライン川についてもう少しのべよう。私の今回の最大の関心事はヨーロッパにおける広域的汚染の状況であった。スイスのボーデン湖に発したライン川は独仏国境を縫い西独を流れ、一方フランスからのモーゼル川とマース川がルクセンブルグを通ってラインに合流してオランダに入るという国際河川であるが、案の定これら各国間で頭の痛い問題があるとのことであった。フランスでのカリ鉱山やその他の工場排液に西独からのも加えられて、塩化物イオン濃度が300㎎となってこれが農業の盛んなオランダの水面下の土地に、それは1,000年の昔から塩抜きを続けている土地に浸みこみ、農作物に被害を与えているという。これは国際間の裁判に発展しそうだとのことであった。しかしこれもいずれはＥＣ組織で解決していくであろう。なお私達が帰国直後のニュスでは、スイスのある州では合成洗剤の使用を禁止すると報じていた。ああ日本は離れ小島でよかったと思う。

次に大気関係である。ロッテルダムと接するシーダム市のライモンド情報管理組織、ルール工業地帯、ウィーン市等いずれもSO_2とふんじん測定監視は、手際よい通報組織と共に日本の場合と大して違わない。然し規制値は日本には及ばない。工場と住宅が離れているからそれでよい。ライモンド情報本部では、ロッテルダムの石油化学工場で250 mの大煙突を建てたところ、海の向うのスウエーデンから“なぜソ連の方に煙をやらないのか”とクレームを言ってきたと苦笑して言った。同様にノルウェーでは自国内の発生量の2倍のSO_xが英国からのもらいものであるという。将来日本も、隣国の工業化が進んだ場合どうであろうか。ちなみに名古屋地区における大気中のふんじんのバックグランドの20～50%は中国の黄砂によるというから。

ウィーンでは燃料の重油中のＳ分は5%のものを使っている。NO_xも0.2㎎程度という。しかし家庭台所で5㎎もあるのでどうしたらよいか、そこで台所に換気扇を設ける法律をを作るという。私は日本で窒素酸化物規制を厳しくしているのは少しナンセンスであると早くから考えているが、このことは別に機会があればのべる。なお、ウィーン市でのSO_xやふんじん等の測定予算は年間6,400万円とのことであった。またウィーンでは雨の降り始めには酸性の雨が降るが、しばらくするとアルカリ性になり易いという。前者はSO_xが濃厚なためであり、後者は古い石造石灰建築物の多いためであるらしい。このウィーン市での説明者は実直な人であった。現在ふんじんとガスの組織を研究中であるといって、話の後で蛍光X線と液クロのチャートを私に見せてくれた。オランダと西ドイツの一部では、説明者が表向きの広報官であったために我々の質問をこなし得ない場合があった。しかしウィーンとスウェーデンではあまりその心配は無かった。ウィーンでは次にI.A.E.A.（国際原子力機関）を訪問した。マイラー博士他2名の博士を揃えた豪華メンバーが、ウィーン大学教授でI.A.E.A.国際職員の西

脇教授を通訳として我々を迎えた。原子力利用を進める上での最重要課題であるリスクアセスメントについて、1日目に2時間、2日目にも約2時間の説明を受けた。話の一部でスリーマイル島の事故以降の各国の原発についての傾向として、アメリカは反対が増え、オランダもやや増えたが、フランスでは反対が少し下降して賛成が上昇し、ドイツは50%以上が賛成となりオーストリアでは、前回の国民投票をやり直せ（前回はきわどい差で反対が勝ち、新設の原発を野ざらしにしているのは周知の通り）という気運になっていると説明があった。ここで西脇教授には大変お世話になった。2日目には先生の奥さん（オーストリア人）と子供さんと我々5名とで昼食を共にした。

ところで、ウィーンではシェーンブルン宮殿のすぐ隣にホテルをとっていながら、遂に観ずじまいであった。日中はぎっしりの日程である。観光はおろかショッピングもできない（夕方5時を過ぎると店は閉められる。土曜半どん日曜休店）。ヨーロッパの男はいったい何時買物をするのか。次に北欧スウェーデンに飛ぶ。夜11時にやっとホテル着。いかに白夜の国とはいえこれではちと遅すぎる。くたびれ果てたがまだ晩めしを食べていない。どこかレストランは開いていないかとくり出す。帰ってきたのは午前2時。翌日のモーニングコールは6時。この時が一番ひどかったがだいたい今回の旅行は朝8時から9時にかけて出発し、視察先からホテルに帰るのは夕方7時頃であり、それから街に出て晩めしは8時以降となるのが日課であった。

ホテルで飯を食えば高くて味気ない。昼は臭い所やゴミ捨て場を歩き日が暮れて帰るので余計に街がどうなっているか気にかかる。2度とこの地を踏めないぞと思うと、何もかもが1日の疲れを忘れさせて街へとくり出す。

話を戻そう。ヨーロッパ各国で、水質面ではスウェーデンのみは抜けていないと前述した。

スウェーデン環境保護庁とストックホルム市役所の下水処理場でそれがよくわかった。水と森林が豊かなこの国では、自然を保護する熱意はなみたいていのものではない。湖沼の10%は死んでしまっていて極めて残念であるという。しかし10%とは……日本ではこうはいかない。

第1回の国際環境会議を開催した国だけのことはある。初めにスライドによって水質汚染の内容と検討の方法、大気汚染の現状と対策法、環境と人間生活との関係、レクリェーションと文化等の説明が行われた。日本で見聞きするのとよく似ているなと聞いていたが、後半になるとどうも差があるように思えてならない。オランダや西独でもそうであったが、彼等は環境とは水質や大気もあるけれど、話を景観、レクリェーションや文化に集約する。昼食は1時間以上、夕食は2時間もかける人達である。夏休みは1ケ月はとる。どこの訪問先でも今担当者が休暇中でという。わが九環協の土曜日の体制が1ケ月半続いているようなものである。街でも村でもキャンピングカーが数多く行き交う。ぼつぼつ休暇を終っての帰途であるとのこと。このように話が違う。しまいには私達ももっと楽しまなければ損だなあと考えこんでしまう。しかし日本に帰れば働きバチから一歩も抜けられないのである。さて最後にストックホルムの地下大下水処理場に行ってどぎもを抜かれる。20ヘクタールもあろうか。その広さと技術。69,000トンのばっ気槽が地下というのに悪臭を感じさせないのである。放流ＢＯＤは平均10㎎、岩盤をくり抜いたこの大地下処理場は、人間のやる気の有無を問うにこの上もない見本である。

こうしてスウェーデンを最後に今回の公式訪問をすべて終了して午後ロンドンに着き、翌日は5時にたたき起こされて7時出発、ヒースロー、ブラッセルと息つく間もなく乗り換えて成

田に送り返された。さて今にして思えば国が違い歴史も違う。地勢・資源・文化等も異るので、問題点や対処の仕方が違ってもそれは当然ではないだろうかと。対策が後追いで忙しいのは同様であろう。彼等の水質対策は生ぬるいと当初は感じたが結局は一部分のアラ探しのようなものであった。日本的モノサシはそのままあてはめてはいけない。ライモンド情報担当官のエルブステイック氏は、日本に2回来たという親日家であったが、日本は住宅と工場が隣組ではないか。あれでは技術にも限界があろうと同情して言った。西独ケルン市で、ライン景観連盟のダーメン博士は"住みよい環境とするためには、人間が景観を造り、文化を保存することにある"と。最後に思う。日本では環境に手を入れるとそれがすぐ公害になるといって騒ぐのである。ルール工業地帯の森林で、昔ここはゴミ捨て場であったと聞かされたとき、あるいはアイセル大干拓で野鳥の宝庫を眺めたとき私は一つの解答を得た。